

中国語、日本語における人称代名詞の使用とそこに窺われる文化の違い

張 佩 霞

1. 問題の提起と本稿の目的

言語体系の中で、人称代名詞は言葉を操る人間と最も緊密な関係にあり、言い換えれば、言葉を操る人間はいつも、自分か、話を聞く人か或いは話に出てくる人かによって、人称代名詞を使い分けている。それに言葉も違い、文化も違う場合、人間はどのように自分を表現し、自分と他人との関係をどのように捉えているのかなども当然違ってくるのが予想される。そしてそれらの違いは当然人称代名詞の使用にも投影されてくると想定できる。例えば、英語に人称代名詞という概念を立てることにあまり異議はないようであるが、日本語に人称代名詞を立てる必要があるかという、必ずしもそうではない。従って、人称代名詞の使用からして、各言語を操る人間が自分と他人との関係をどう把握しているのか、人間が一つの社会の中で、自分をどういうふう位置づけているのかという自分対社会の社会構図のいっばんを窺うことも不可能ではないと筆者は考える。

本稿では、中国語や日本語における人称代名詞に関する先行研究を参考にしながら、人称代名詞の使用を社会との関係という視点から捉え、そして両言語に存在する人称代名詞の転用を比べ、それぞれどういう目的で行なわれ、どういう効果をもたらしているのかを社会との関連において調べる。さらにこれらを通して両言語における人称代名詞の使用の本質的な違いを追究する。

(2)

2. 今までの研究

代名詞については日本語においても、中国語においても今まで多くの研究がなされてきた。特に、代名詞の本質や代名詞の歴史的変遷、各代名詞の文法的規範などについての研究は多かった。以下本稿と関係のある研究だけをいくつか紹介する。

まず日本語の代名詞について、特に人称代名詞について、鈴木孝夫氏（1973）が日本語では、必ずしもいつも自分を指す時は「私」や「僕」、相手を指す時は「あなた」や「君」のような人称代名詞を使うのではなく、多くの場合親族関係を示すことばや職業名を用いることを指摘し、「要するに現代日本語では、ヨーロッパ語に比べて数が多いとされている一人称、二人称の代名詞は、実際には余り用いられず、むしろできるだけこれを避けて、何か別のことばで会話を進めていこうとする傾向が明瞭である。これと比較すると、一つまたは二つの、数少ない人称代名詞が、しかし口を開けば必ず繰返し繰返し出てくるヨーロッパの言語は、日本語とは著しく性格を異にすると言えよう」（133頁）と述べている。そして、「日本語のいわゆる狭い意味での人称代名詞は他の語彙から独立した、一つのまとまった語群を、形体論的にも機能の見地からも形作っていない以上、これだけを切離して扱う意味がなく、むしろ、親族名称、地位名称などと一括して、話し手が自分を表わすことば、および相手を示すことばという広い見地に立って、それぞれを自称詞、対称詞と呼ぶ方が適切であると私は思っている。対話の中に登場する第三者は他称詞と呼ぶことになる。」（134頁）というふうに提議している。ここから私達は日本語の人称代名詞の特殊性についていくらか認識することができる。

また、安藤貞雄氏（1986）は日本語の人称代名詞の転用について、「日本語では、自称詞を対称詞に転用すると、侮蔑の気持ちを表すことができる。卑下を表す自称詞を相手に押しつけるからである」（233頁）と述べ、

ワレは海の子。[自称詞]

ワリャ悪いやつだ。[対称詞]

それはテマエがいたします。[自称詞]

テメエなんか死んじまえ。[対称詞]

の例を挙げている。

ほかに角野志緒里氏(1985)が「おの」系人称代名詞の転用について、多くの作品を調べ、「おの」系人称代名詞の自称用法から対称用法への転用を確認し、さらに、その転用は自称用法の待遇意識の低下を伴って起り、話し手が、自分自身を卑称化した代名詞であらわすのと同じ意識から「おの」系人称代名詞を対称代名詞として用いられるようになったのではないかと提案している。

中国語の人称代名詞について、特に人称代名詞の転用について、張煉強氏は「人稱代名詞の転用」という論文(1982)で、中国語における人稱代名詞の転用の実情を全般的にまとめている。それによると、中国語においては、単数から複数へ、複数から単数への転用があるほか、一人称から二人称・三人称へ、二人称から一人称・三人称、三人称から一人称・二人称への転用があり、転用が行なわれるのは主に修辭のためであって、その修辭効果は以下の六つにまとめることができるとしている。

1) 単数で複数を表わすときは、つまり多くの同類の中から一つだけを取り出し、その指し示す対称を高度の集中によって、単一明確にし、率直で、力強い印象を与える。例：

(1) 我→我們(私→私達)

我国／我が国

(2) 他→他們(彼→かれら)

……这些我都有真凭实据，如果他们要存心跟忠王作对，頼文洪拼着性命不要，就跟他冲天。／これに関しては、私の手元に全部証拠が揃っているので、彼等が本当に忠王を裏切るとしたら、この頼文洪は命をかけても彼(→彼ら)と戦う。(歐陽予倩選集、219頁)

2) 複数で単数を表わすときは、つまり多くの同類の中の一つを隠し、その指し

(4)

示す対象を多くの同類の中に隠すことによって、表現を含蓄にし、えん曲で謙遜な印象を与える。例：

(3) 我们→我（私達→私）

甲　这句话真不象你这样聪明的人说的。／これはとても貴方のような頭のいい人の口から出た言葉らしくないですね。

乙　经理自然比我们聪明。／マネジャーは勿論私達（→私）より頭がいいんですよ。（曹禺選集、251頁）

(4) 你们→你（貴方達→貴方）

真是，象你跟了你们先生又到巴黎，又到伦敦，又到纽约，真是看不尽的繁华世界。／そうですね。あなたのようにあなたたち（→あなた）のご主人様と一緒にパリに行ったり、ロンドンに行ったり、ニューヨークに行ったりして、本当に幸せ一杯ですね。（歐陽予倩選集、128頁）

3) 二人称を使うべきところにほかの人称の代名詞を使って、相手を礼儀正しく表に出し、相手を直接に指し示す率直さを避け、えん曲で、暖かみのある感じを与える。例：

(5) 人家→你（人→貴方）

刚才听得小弟说，你有了很好的太太，还有了可爱的孩子了，象我这样一个游丝似的系在人间的人，何必再来破坏人家的幸福呢？／さっき弟から聞いたんですけど、あなたは今いい奥さんもいるし、可愛い赤ちゃんにも恵まれているそうですね。私のような後どのくらい生きられるかもしれない者が何でまた人（→あなた）の幸せを壊すことがあるのでしょうか。（田漢劇作選、128頁）

(6) 他→你（彼→貴方）

二姐儿倒不好意思说什么，只见三姐儿似笑非笑，似恼非恼的骂道：坏透了的小猴儿崽子！没了你娘的说了！多早晚我才撕他那嘴呢！／二番目の姉さんは何も言わなかったのですが、三番目の姉さんは笑い半分怒り半分で「この意地の悪い猿め。他に言う言葉はないのか？いつかはきっと

彼（→あなた）の口を引っ張ってやる。…（紅樓夢、64回）

- 4) ほかの人称の代名詞を使うべきところに二人称を使い、相手を強引に引っ張ってきて、相手に自分のことのように感じさせ、或いは関係の疎遠な第三者を関係の親しい相手にする。例：

(7) 你→我（貴方→私）

我每一次看见她，都有点害怕。她那一双眼睛就跟蛇的眼睛一样，凶煞煞地、冰冷冷地死盯着你，你就禁不住要打寒噤。／私は彼女を見る度に怖がるの。その目はまるで蛇の目の如く、鋭く、冷たくあなた（→私）を見つめ、あなた（→私）は思わず身震いしてしまう。（沫若劇作選、97頁）

(8) 你→他们（貴方→彼等）

他们租地主的地，全家就象卖了身子，听凭地主摆弄。……稍微有点不顺心，地主就拔锅卷席，撵你出去。／彼等は地主から田を借りて、体すべてを地主に売った如く、地主の言いなりになっています。…少しでも気に食わなければ、地主はもうあなた（→彼等）を追い出してしまうのです。

（楊朔散文選、39頁）

- 5) 三人称や「人」で一人称や三人称を表わし、自分或いは他人を手軽に押し出し、客観的で、当事者と全然関係ない姿勢を持ち出し、よって、強烈的な主観的色彩を誇張し、話も面白くなる。例：

(9) 人家→我（人→私）

祥子一声没出。“你说话呀！成心逗人家的火是怎么着？你有嘴没有？有嘴没有？”她的话越说越快，越脆，象一挂小炮似的连连的响。／祥子は何も言わなかった。「何か言ってよ。わざと人（→私）を怒らせているの？あなた口持っていないの？持っているでしょう？」（駱駝祥子、149頁）

(10) 人家→他（人→彼）

现在人家可不要铁蚕豆娄！她考上了空军！／いまもう人（→彼女）は空豆をいらぬよ。彼女はもう空軍の試験に合格したんだもん。（老舍劇作選、171頁）

(6)

(11) 他→我 (彼→私)

至今珍大哥还报怨后悔呢。你明儿见了他，好歹赔释赔释，就说我年轻，原没见过世面，谁叫大爷错委了他呢。／今でも珍兄さんは後悔したと言っている。あなたも明日彼に会ったら、何とか言っ。例えば、私は若いし、世間知らずなのに、何で叔父さんは間違えて彼女 (→私) に任せたのかって。(紅樓夢、16回)

6) 一人称の複数表現で二人称・三人称を代用し、これをもって、強引に他人を自分と一つの枠に置き、指し示す対象と同じ境遇にあり、楽しみや苦しみを分かち合うことを示す。心暖かく聞こえる表現である。例：

(12) 咱→你 (私達→貴方)

我嫂嫂说：娘，咱可不能卷着舌头说话。是你不让大江来的呀！／私のおねえさんは「お母さん、我々 (→あなた) はこういうことを言っはいけないんじゃないでしょうか。あなたが大江さんに来ないようにと言ったのではありませんか。」と言いました。(小説月報、1980年第9期62頁)

(13) 咱们→你们 (私達→貴方達)

甲 ……(然后向同学)达尔文研究鸟蛋。孵出小鸟来，失败了多少次？／
(それから学生に向かって) ダーウィンは鳥の卵を研究し、雛がかえるまで、何回失敗したか知っていますか？

乙 几百次。／何百回です。

甲 可咱们才失败一次，就泄气啦！／しかし、我々 (→貴方達) は一回の失敗でもう諦めるんですか。(劇本、1980年6月号28頁。台本によれば、甲は乙たちの実験には参加しなかった。)

(14) 我们→你 (私達→貴方)

你可以冷静点。现在你我都是有子女的人。如果你觉得心里有委屈，这么
大年纪，我们先可以不必哭哭啼啼的。／落ち着いて、今あなたも私ももう
子持ちですよ。文句があっても、こんな年になっているんだから、我々
(→あなた) が泣くのはやめましょう。(曹禺選集、64頁)

(15) 我们→他 (私達→彼)

刚要告辞，只见奶子抱了大姐儿出来，笑说：王老爷也瞧瞧我们。／帰ろうとしていたところへ乳母は大姉を抱いて出て来て、笑いながら「王叔父さんは私達（→彼女）をも見てください」と言った。（紅樓夢、42回）

3. 本 論

3.1 人称代名詞の数に見られる中日両言語ないし文化の違い

現代中国語の人称代名詞の数はあまり多くない。

表1 現代中国語における人称代名詞*

	一 人 称	二 人 称	三 人 称	不 定 称
单 数	我	你	他、她、它	誰
複 数	我们、咱们	你们	他们、她们、它 们	

* 「咱们」はいわゆる包括的一人称複数で、「我们」は時には包括的、時には除外的一人称複数である。

表1に示したように、現代中国語では、単数は「我、你、他（它、她…発音は全部同じ）」の三つしかなく、複数は単数の後ろに「们」を付けるほかに、また「咱们」も姿を見せるのであるが、それでも発音から見ればせいぜい四つの表現に過ぎない。

一方、現代日本語においては人称代名詞とされるものの数は中国語の倍以上もある（表2）。

日本語の人称代名詞は自分や相手の身分、自分と相手との関係などによって、細かに使い分けている。ここから日本社会の構成においては、日本人一人一人の個人が互いに緊密な関係、少なくとも表面的には、緊密な関係にあることが窺われる。人々は日常言語生活のなかで、互いの関係が円滑に営まれるように言葉遣

(8)

いに神経を使い、特に人称代名詞のような直接言語行為にかかわる話し手、聞き手を指し示す表現に至っては、とりわけ角がたたないように、極度に気を配っている。この現象は人間関係を円滑にするという意味合いのほかに、昔の身分制度の残留もあると見てよかろう。なぜかという、一人一人の人間がお互いに平等の立場に立っているならば、だれでも自分のことを「I」と言え、相手のことを「you」と言えるはずだからである。

表2 現代日本語における人称代名詞

	一人称	二人称	三人称			不定称
単数	わたくし	あなた	かれ	かのじよ	やつ	だれ
	わたし	おまえ	このかた	そのかた	あのかた	どなた
	ぼく	きみ	このひと	そのひと	あのひと	どいつ
			こいつ	そいつ	あいつ	

* 日本語の人称代名詞の複数形は大体単数形の後ろに「がた」、「たち」、「ら」などを付けて作る。

表3 古代中国語における人称代名詞

一人称	我、吾、魚、余(予)、台、朕、卯、臣、仆
二人称	女(汝)、尔、而、乃、若、戎、子、君、公、执事
三人称	彼、厥、其、之、夫、匪、伊、渠

* 以上は単数形のみ。

実のところ、古代中国語にも人称代名詞の数が多かった。表3はいくつかの説をまとめてできた古代中国語における複雑な人称代名詞の体系図である。古代社会では、身分制度のもとで、人々は自分や相手の身分によって、人称代名詞を使い分けていたと推定される。例えば、「朕」はほとんど皇帝しか使用できず、「臣」は役人が皇帝に向ってしか使えなかった。これはあくまでも身分を重視する社会では身分関係が円満に保たれるために互いに相手の身分や自分の身分にこだわっ

ていることの言語生活への一つの投影に過ぎないと言うことができよう。

やがて、社会が発展し、封建社会も新しい社会制度にとって代われ、人々の対人意識も変わり、ついに、人称代名詞も簡略化されたと考えられる。

しかし、なぜ日本語の人称代名詞は簡略化されずに使用されてきたのであろう。これはやはり日本人の国民性に回答を求めることができるのではないかと思われる。今まで、日本人は外国から様々な思想や、制度、技術を取り入れてきた。しかし、それは今まで自分たちが馴染んできたものを捨てたうで行なわれたものではなく、自分たちの社会に受け入れやすいように新しいものに工夫を重ねて生活に融合させたものである。言い換えれば、日本の歴史においては、意識の面での徹底的な変革はなかったのである。そのために今は身分制度こそなくなったが、日本社会を構成する一人一人にはまだ昔の人間関係の意識が保たれており、人称代名詞の使用にも投影されているのである。一方、中国では、昔は身分制度はあったが、中国は大体古いものは新しいものにとって変わられるのが国民性なのだから、昔の伝統的な意識は無くなっていることが多い。それで、身分制度のない今の社会では、言語の上でも、大きな変革が見られ、昔の多くの人称代名詞は跡形もなく消えてしまったのである。

3.2 人称代名詞の使用頻度から見られる中日両言語ないし文化の違い

筆者は中国語の短編小説『在其香居茶館里』、『小二黒結婚』、『為奴隶的母親』の原文と日本語の訳とを比較して見たところ、次のような結果が得られた。

(10)

表4 中国語の原文に使用されている人称代名詞の総数と語別数

	我	咱	你	他	她	谁	我们	咱们	你们	他们	老子	它們	語別数	総数
在	46		64	16		2	1		3	4	9		8	145
小	40	8	68	13	6	10	1	1	3	3	1		11	154
為	89		91	22	37	3	1		1	1		1	9	246

表5 日本語の訳文に使用されている人称代名詞の総数と語別数

	在	小	為
おれ	11	2	22
こっち	1		
こちら	1		
わたし	4	12	46
あたし		2	
わし	1	10	4
おれさま		1	
おら			2
ぼく		5	
おまえ	1	7	30
てめえ	1	4	
あなた	1		8
あんた	3	23	22
きみ	5	1	
きさま	1		
おまえさん		4	3
かれ		1	

そいつ	1	1	
そっち	1		
あいつ		2	
あちらさん			1
あれ			15
やっこさん	1		
だれ	6	7	4
わたしたち	1	2	
おれたち		1	1
ぼくたち		1	
わしら		1	
あんたがた			1
おまえさんたち		1	
やつら	1	1	
語 別 数	17	21	13
総 数	41	89	159

* 中国語との関係で、「この人」、「そのかた」などを無視した。

表6 原文と訳文に使用されている人称代名詞の総数と語別数の比較

	語別数 (中国語/日本語)	総数 (中国語/日本語)
在	8/17 (47%)	145/ 41 (3.5倍)
小	11/21 (52%)	154/ 89 (1.7倍)
為	9/13 (69%)	246/159 (1.6倍)

上記の表から分かるように、中国語の小説に用いられる人称代名詞の語別数としての数は少ないが、人称代名詞の使用総数は多い。一方、日本語の場合、語別数としての用語数は多いが、人称代名詞の使用総数はほぼ中国語の半分しかない。

日本語では人称代名詞の使用頻度が高くないことは前掲の鈴木孝夫氏も指摘しているが、どうも人称代名詞の数とその使用頻度とは反比例の関係をなすようである。人称代名詞の数が多いということは、人々はお互いの身分や関係を非常に重視して、ついそれらの違いに応じて、複雑な人称代名詞の体系を作りあげてしまうと考えられる。しかし、いくら丁寧な言い方をしても、人称代名詞は所詮自分や相手を直接指し示す表現にほかならないから、率直さは免れない。そこで動詞の後ろの「てくれる」、「てあげる」、「ていただく」のような表現も数多く作り出され、これらの使用によって、文中の「私のために」、「あなたのために」というような直接的な表現を避けることができるようになる。

上記のことを逆に考えれば、中国語における人称代名詞の使用総数が多いことも理解できるであろう。

3.3 人称代名詞の転用から見られる中日両言語ないし文化の違い

人称代名詞の転用というのは、本来ある決まった人称を表わすはずの人称代名詞が具体的な運用のなかで、ほかの人称を表わすのに使われることである。

そもそも人称代名詞の使用は言語行動の担い手と深く係わり、担い手との関係からいろいろ定まってくる。そしてこの人称代名詞の使用で、言語表現の担い手、受け手、話中に出てくる人物などはっきりと示されるのである。こう考えれば、人称代名詞の転用はかなり理解しにくいものである。しかし、事実上では、中国語にも日本語にも転用の現象が見られる。次に、何のために人称代名詞の転用が起こったのか、人称代名詞の転用にはどういう具体的なものがあるのかなどから、中国語と日本語との違いを見ていくことにする。

3.3.1 人称代名詞の通時的な転用

表1と表3から分かるように、中国語の人称代名詞の転用には、通時的なものはない。つまり、同じ人称代名詞はある時代では、一人称或いは二人称であり、ある時代ではまたほかの人称を表わすというように転用されるという現象がない。しかし、日本語の人称代名詞の転用はちょっと事情が違うのである。表7は各時代に用いられる日本語における人称代名詞の体系図である。

表7 歴史的に見る日本語の人称代名詞*

	第 一 人 称	第 二 人 称	第 三 人 称
奈良時代	あ・あれ・わ・わけ・われ・まる	な・なれ・い・いまし・おれ・きみ・なびと・まし・みまし・なむち・わけ	し
平安時代	あ・あれ・わ・われ・なにがし・おのれ・みづから・まる・やつかれ	な・なれ・きむぢ・なむぢ・まし・おのれ・われ・そこ・わがおもと	あ・あれ・か・かれ
鎌倉時代	まる・われ・それがし・わらは・朕・愚僧・わ	なむぢ・おのれ・おれ・おんみ・きみ・ごへん・わきみ・わごぜ・わたの・わぬし・わひと・うれ	きやつ・あ・あれ・か・かれ
室町時代	わたくし・おれ・み・われ・これ・こち	わごぜ・わたの・ぬし・おぬし・きしよ・きはう・わごりよ・わごれう・あれ・そち・そなた・それ・われ	あいつ・こいつ・きやつ・あ・あれ・か・かれ

江戸時代	おれ・わたくし・わたし・それがし・みども・みづから・わし・こち・こちと・わたい・わちき・わつち・おいら・おら	おぬし・おのれ・わがみ・われ・ありさま・うぬ・おまへ・きさま・おまい・おまいさん・おまはん・おまへさま・おまへさん・おまへはん・おめへ・おめへさん・あなた・おのし・きこう・ぬし・いづれも	そいつ・ぬし・あいつ・こいつ・きやつ・あ・あれ・か・かれ
明治以降	おれ・ぼく・わたくし・わたし	あなた・おまへ・きさま・きみ	

* 表全体は『品詞別日本文法講座名詞・代名詞』に基づいたものであるが、当文献の「代名詞の変遷」に紹介されたものは一応すべて表にまとめた。

表7から「おれ」、「おのれ」、「あ」、「あれ」などの人称代名詞の転用があることが分かる。もちろん、一つの人称代名詞が時代の移り変わりに従って、急にほかの人称を表わすようになるということはありません。こういう通時的な転用はあくまでも共時的な転用の芽生えがあって、そして、次第にその転用の用法に落着いていった結果である。

3.3.2 人称代名詞の共時的な転用

ここで言う共時的な転用とは主に現代中国語や現代日本語における人称代名詞の転用である。現代中国語にも現代日本語にも人称代名詞の転用はある。しかし、次に紹介するように、その転用にはいくつかの違う側面がある。

3.3.2.1 中国語では一人称の複数表現を他の人称を表わすのに転用されることはあるが、日本語には非常に少ない。

前掲の例文(12、13、14、15)からも分かるように中国語におけるこのような

表現は大体相手を慰めたり、非難したりする時に用いられる。相手や他人のことを言っているが、一人称の複数形を使うことによって、相手や他人との一体感を訴え、或いはニュアンスを弱め、或いは人に自分の暖かい心を伝える効果をもたらす。ついでに、この場合相手や他人が立場の弱い人間であることが多い。

次に、もう二つ例文を付け加えておく。

(16) 咱们别哭，妈妈出去就回来／我々（→あなた）は泣かないでよ。ママすぐ戻るから。（『現代漢語詞典』商務印書館1992、1439頁）

(17) 老敬叔，别难过啦，恐怕队伍上也不准是故意的，也该着咱家倒霉／敬叔父さん、悲しまないで。軍隊の人がわざとやったのではないと思いますよ。これは私達（→あなた）の家の運命なんですね。（『王林選集』下 百花文艺出版社1983、67頁。村長がある村民を慰めている言葉。村長と村民は家族同士ではない）

3.3.2.2 日本語では一人称の単数と二人称の単数の間の互いの転用が見られるが、中国語には二人称の単数を一人称に転用する表現しかない（例7）。

「ぼく、いくつ？」とよく耳にする。この場合の「ぼく」は、決して話し手を指すものではない。かといって、「ぼく、行ったよ。」の中の「ぼく」は話し手自身を指すものである。このように、現代日本語では「ぼく」は話し手を指すこともあれば、聞き手を指すこともある。また、前の例にも見られるように、「てめえ」や「われ」も同じ用法を持つ。ただ、「ぼく」、「われ」は一人称としての用法が多いから自称詞、「てめえ」は二人称としての用法が多いから対称詞とそれぞれ呼ばれていて、他の人称を表わす用法はすべて転用とされた。

一方、中国語には二人称の単数を一人称に転用する表現しか見られない。

(18) 这孩子要我给他买个手风琴。一天三番五次地老跟你在这个问题上兜圈子。／この子はわたしにアコーディオンを買ってもらいたくて、一日に何回も貴方（→私）にねだるんですよ。（『現代漢語詞典』商務印書館1992、828頁）

(19) 哎，真是，东北丢掉了以后，我还梦想着在关里苟延残喘下去。……这你还

往哪里躲吧? / ああ、そうですね。東北が陥ってから、私は内地で行き残る夢を見ていた。…こうなったらあなた (→私) はどこに逃げるのだろう。

(『王林選集』下 百花文艺出版社1983、17頁)

- (20) 可是蒋介石硬逼着我们去打红军。同时又不给你军粮。 / しかし、蒋介石はむりやりに私達を紅軍に立ち向かわせ、同時に、またあなた (→私達) に食糧を与えない。(『王林選集』下 百花文艺出版社1983、47頁)

ここでは、本来一人称を使うべきところに二人称を転用し、聞き手を話しの内容に引きずり込むことによって、同感を求め、話しの伝達力を高めることをはかる。

3.3.2.3 中国語には三人称の単数を一人称や二人称に転用したり、二人称の単数を三人称の単数に転用したりすることはあるが、日本語にはない。

中国語では、自分や相手のことを直接指すのを避け、三人称の「他」などで代用することによって、話しの内容と自分や相手と関係なく、客観的に述べていることを示し、ある時は恥しさを隠すためであり、ある時は自分には責任がないことを強調するためだと考えられる (例6、11)。例：

- (21) 一个无家可归，一个流浪在外乡的青年，虽然他明知道，他没有跟摩登小姐讲恋爱的资格。可是，他也是人，他在这种恶劣的生活中，也感觉着需要一点精神上的安慰。 / 帰るところもなく、流浪している若者は、モダンなお嬢さんと恋をする資格はないことが彼 (→私) ははっきりと分かっている。しかし、彼 (→私) も人間だ。彼 (→私) もこんな生活の中で、精神上的の慰めを必要としている。(『王林選集』下 百花文艺出版社1983、27頁)

- (22) 我竟分辨不清好歹人，我竟把最关心最赤诚爱我的，当做坏人看待，用尽了讥消的口吻挖苦他，哎，我…… / 私は人のよしあしがわきまえられず、最も私を愛している人を悪人扱い、いろんな悪口を尽くして彼 (→あなた) をあざけってきた。ああ、私は… (『王林選集』下 百花文艺出版社1983、50頁)

3.3.3 人称代名詞の転用のまとめ

上記で日本語における人称代名詞の転用と中国語における人称代名詞の転用の実情を調べ、それについて考察してきた。それらの考察を通して、日本語における人称代名詞の転用と中国語における人称代名詞の転用とは全然違う性格のものであることが分かった。

即ち、日本語における人称代名詞の転用と中国語における人称代名詞の転用とは次元が違うように思われる。中国語の場合いわゆる文構成上ある特別なニュアンスを表わすために転用の手法が使われており、まさに張煉強氏が指摘したように、修辞のために転用が行なわれており、ある意味では、これらの人称代名詞はその本来の意味がそのまま使われているのではなく、そこにそれを使うことによって、いろいろ付加的な意味が加わっている。一方、日本語の転用はどれも語彙レベルのもののように見える。つまり、日本語の転用は人称代名詞をその本来の意味のままで、言い換えると、あまり付加的な意味なしで、転用されている。

先ず日本語に通時的な転用があつて、中国語にないことが、一つの証拠となりうる。語彙レベルの転用だからこそ、日本語の語彙体系にそういう変化が見られるのである。

次に、中国語における人称代名詞の転用はすべて文構成上ある特別なニュアンスを表わすために行なわれており、転用によって、その単語の持つ意味以外の何かのニュアンスが新たに加わってくる。実を言えば、その単語自身の意味としては必ずしも転用されているとは言えない。一方、日本語の場合、前にあげた「ぼく」も「われ」も「てめえ」もみな単純に或いは一人称或いは二人称に転用されている。ここで言う単純とはつまり、その代名詞の指す対象にだけ変化があり、全然別の付加的なニュアンスが加わったということではない。いわば、日本語におけるこのような転用こそ本当の転用だと言うことができる。

4. 結 論

以上の3節にわたる中日両言語における人称代名詞の使用状況などについての考察を通して、代名詞の使用も日本社会は集団社会、中国社会は個人社会ということへの裏付けになりそうであることが分かった。

まず、日本語に人称代名詞の数が多いことは人々がある集団の中で生活し、お互いの関係などを非常に重視し、微妙に違うニュアンスを表わせる複雑な人称代名詞の体系を次第に作り上げてきたのだと考えることができよう。

次に、人々はあまりにもお互いの関係を重視し過ぎて、個人に対してそれをじかに指す人称代名詞が使いにくくなるようになる。そしてお互いに「個」的存在ではなく、むしろ「集団」的存在としてとらえるようになる。

最後に「個」的存在ではなく、「集団」的存在としてとらえるようになると、一つ一つの「個」を表わす人称代名詞もその互いのほりあい関係が弱まり、よって語彙レベルの転用が可能になる。

集団でなくあくまで個に重点を置く中国社会で使われている中国語は正にこれと鏡像関係になっている。

以上、社会言語学的な考え方で中日両言語における人称代名詞の使用についての分析を試みたのであるが、筆者は知識も乏しく、勉強も不十分の上、文中の所々に主観による憶測がみられるかもしれない。ご指摘、ご訂正の程よろしくお願ひ申し上げたい。

主要参考文献

- 『品詞別日本文法講座 名詞・代名詞』 明治書院 1972
- 『琉球方言文法の研究』 内間直仁 笠間書院 1982
- 『英語の論理・日本語の論理』 安藤貞雄 大修館書店 1986
- 『岩波講座日本語 6 文法 1』 岩波書店 1976
- 『言葉と文化』 鈴木孝夫 岩波新書 1973

- 「人称代名詞の転用について」角野志緒里『国語と教育』第10号 1985
- 「古代漢語の人称と称呼」牛島徳次 『中国語学』中国語学研究会1965、6
- 「中古漢語の人称と称呼」牛島徳次 『中国語学』中国語学研究会1966、3、4
- 「人称代名詞の転用」張煉強『中国語文』中国社会科学出版社1982、3
- 「古代漢語の人称代名詞についての研究」黄盛璋 中国社会科学出版社1963、6
- 『在其香居茶館里』沙汀（『中国現代文学作品選読上』華東師範大学出版社 1987に収録）
- 『小二黒結婚』趙樹理（『中国現代文学作品選読上』華東師範大学出版社 1987に収録）
- 『為奴隷的母親』柔石（『中国現代文学作品選読上』華東師範大学出版社 1987に収録）
- 『茶館にて』守屋洋（『中国の革命と文学5 抗戦期文学I』竹内好編 平凡社 1972に収録）
- 『奴隷となった母親』松井博光（『中国の革命と文学5 抗戦期文学I』竹内好編 平凡社 1972に収録）
- 『小二黒の結婚』小野忍（『中国の革命と文学7 趙樹理集』駒田信二編 平凡社 1972に収録）

（千葉大学大学院社会文化科学研究科博士課程在学）